

適正な農薬使用で  
作物を育てる

# SPECIAL 特集 EDITIO

## 国際交流

# JICAプロジェクト「北部タイ省農薬適正技術計画」

### JICAプロジェクト「北部タイ省農薬適正技術計画」

- 目的** 省農薬技術の確立とその普及  
バラ、キャベツ、ミカンモデル作物として、収量や質を落とさず農薬の使用量を減らす
- 構成** 病虫害診断部門:病虫害の診断と適切な薬剤散布および畑の衛生管理  
農薬分析部門:農作物および土壌中の残留農薬の分析  
IT・普及部門:省農薬技術普及のウェブページ作成とワークショップの開催



三重大学生物資源学部・学部長  
**天野 秀臣**  
Amano, Hideomi

**タイでは、**農産物の生産性を上げるために過剰な農薬使用による残留農薬が問題になっています。EU諸国や中国が、高い残留農薬が検出されたタイ産の野菜や果物の輸入をストップしました。日本もタイから多くの農産物を輸入しており、我々にとっても他人事ではありません。タイ政府はこれらの問題を重要視し、特に状況が深刻な北部タイに焦点を当て、我が国への協力を要請しました。そこでチェンマイ大学を拠点として、三重大学と香川大学がサポートする形で、JICAプロジェクト「**北部タイ省農薬適正技術計画**」(2003年11月～2006年10月)がスタートしました。三重大学生物資源学部からはプロジェクトリーダーの天野秀臣学部長、管理運営担当の伊藤進一郎教授を始め20名近くの教員が携わっています。

**日本では、**使用が認められている農薬の、適応作物・使用濃度・使用量・使用回数・使用時期などが厳密に定められ、食品中の残留農薬についても農薬ごとに基準値が

設けられています。さらに農薬のデータベース化や栽培方法のIT化も進んでいます。一方、タイでは一部の農薬について残留基準が定められていますが、病虫害の防除法として大量の農薬投与に頼るケースが多く見られ、大多数の農民は農薬を減少させる方策を求めています。

**プロジェクトの前半では、**このような現状を把握した上で病虫害診断や残留農薬の分析に必要な機器をチェンマイ大学に整備し、診断や分析の技術を指導しました。さらにバラ、キャベツ、ミカンを対象にモデル農家を設定し、6～7人が1グループとなって農薬を抑えても問題なく作物ができることを農民にアピールしました。

**現在は、**モデル農家から得られた情報をデータベース化するとともに、適切な農薬の使用方法などを示したタイ語のウェブページを作成しています。また農民を対象にワークショップを開き、病虫害診断の基本技術、ウェブページやITの利用方法などの普及活動を行っています。プロジェクトは本年10月に終了しますが、6000万人を超えるタイ国民の半数を占める農民への普及活動に対して引き続きタイ政府から援助の要請が来ており、今後も国際貢献のため省農薬技術の普及活動を続ける予定です。

▼プロジェクト：タイ語HPの作成  
【URL】<http://attract.agri.cmu.ac.th/kem/home/index.asp>



三重大学生物資源学部・教授  
**伊藤 進一郎**  
Itou, Shinichirou

三重大学生物資源学部・助教授  
**梅川 逸人** Umekawa, Hayato  
【URL】<http://www.bio.mie-u.ac.jp/junkan/kohgaku/lab5/>

### 農薬の弊害

農薬中毒患者は死亡患者も含めて北部タイで毎年1500人前後(タイ全体では3000～4000人(日本の約20倍)と推測)。流域の土壌・水質汚染、地下水汚染が進行し、農作物から高濃度の残留農薬が検出。



### 【チェンマイ】

首都バンコクの北約700kmにあり、「北方のバラ」と呼ばれる人口約26万人の古都。タイ北部の行政、経済、産業、文化の中心地。

### 【タイ】

インドシナ半島中央部にある王国で、国土の面積は日本の約1.4倍あり、東南アジア随一の穀倉地帯を有している。

**JICA (独立行政法人 国際協力機構) <http://www.jica.go.jp/>**

日本と開発途上国の人々をむすぶ架け橋として、互いの知識や経験を活かした協力をすすめ、平和で豊かな世界の実現をめざしている。